

認知症の人の視点に立って認知症への社会の理解
を深めるための普及啓発に関する調査研究事業

「認知症にやさしい地域づくり」 評価指標の作成

国際大学 グローバル・コミュニケーション・センター
准教授・主任研究員
庄司昌彦 (Masahiko Shoji)

概要・体制

認知症にやさしい地域づくり評価指標（フィデリティスケール／フィデリティ尺度）を設計する。指標は、理論的・外部評価的に与えるものではなく、各地の先進的な実践の優れた点を取り入れ、さまざまな組織や自治体が自主的に判断し、各地域にあった取組みを構築していくことを容易にすることを旨とする。

ワーキンググループ

岡田 誠 （株）富士通研究所R&D戦略本部シニアマネージャー

徳田雄人 （株）スマートエイジング代表取締役

河野禎久 筑波大学ダイバーシティ推進室助教

協力：認知症フレンドリージャパンイニシアチブ

事務局

庄司昌彦 国際大学GLOCOM 准教授／主任研究員

調査手順・対象・時期

1. 「認知症フレンドリージャパンサミット」で意見収集（9月）

- 評価指標（a版）の大枠を提示し、指標の構成要素等に関する意見抽出や、全国の事例収集等を行う
- 行政関係者、福祉関係団体、民間企業等 40-50名

2. 細目に関する仮説の設定（9月）

- 認知症当事者の意見、国際動向等を踏まえ、WG（3名+事務局）で各項目・レベル等の仮説設定を行う

3. 先進地域ヒアリング調査の実施（富士宮・大牟田）（10-12月）

- 仮説検証・評価を行うため、先進地域で認知症の当事者・支援者等を含むインタビュー調査等の情報収集を行う

4. 評価指標（a版）に関する対話型WSの実施（1-2月）

- 3を踏まえた評価指標（a版）を報告し改訂に向けた課題を抽出
- 行政関係者、福祉関係団体、民間企業等 40-50名

本日の報告

0. 前回報告の概要
1. 富士宮市インタビュー調査結果を踏まえた、評価指標案の報告（大分類、中分類）
2. 大牟田市インタビュー調査結果を踏まえた、評価指標案の報告（大分類）
3. 認知症フレンドリーサミットでのディスカッションの報告
4. インタビュー結果からだけでは抜け落ちる可能性のある評価項目（第1回検討会議での指摘事項）について行っている、他分野（まちづくり全般）の評価項目に関する文献調査について

作成作業と具体的イメージ

「まちの人の参加度」等、認知症にやさしいということに関する取り組みをカテゴリ化していく

具体的なアクションのレベルを記述していく

まちによって特色は違う。そのまちの特色を高めるための設計を支援するツール

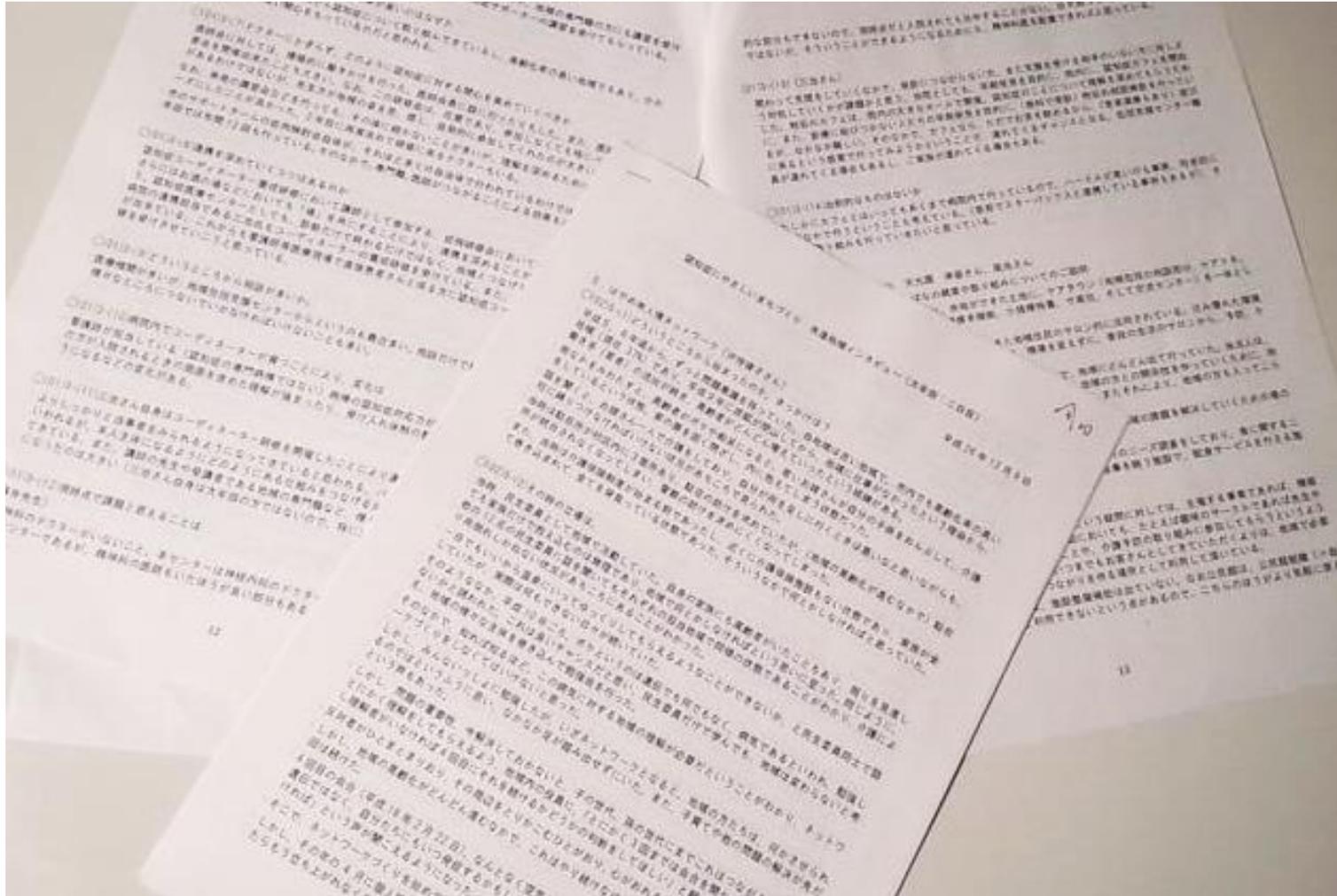
基準	評価・アンカーポイント				
	1	2	3	4	5
〇〇〇〇〇〇					
1	〇〇〇〇〇 - 〇〇〇〇 - 〇〇〇〇 - 〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇
2	〇〇〇〇〇 - 〇〇〇〇 - 〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 〇〇〇〇	
3					
4					
〇〇〇〇〇〇					
1	〇〇〇〇〇 - 〇〇〇				

「自治会」「商店街」「学校」等のサブカテゴリを記述していく

「当事者の声をきいているか」等、様々な項目があるはず

- 特長は街により異なる
- 全てを右にすればよいというものでもない

インタビュー調査の記録 (H26老健事業)



➤ 富士宮・大牟田のインタビュー記録から、発言の中に表れている優れた点や知恵・工夫等を抽出

回	年月日	対象地域	作業内容
1	2015.8.3	富士宮前半	1-(2), (4), (6), (8), (10)
2	2015.8.3	富士宮前半	1-(1), (3), (5), (7), (9)
3	2015.8.8	富士宮前半	1-2-(1), (2), (3), (4), 2-(1), (2), (3), (4), (5), (6), (7), (8), (9), (10), (11), 3-(1), (2), (3), (4), (5), (6), (7), 4-(1), (2), (3), (4), (5), (6), (7), (8), (9), (10), (11), (12)
4	2015.8.11	富士宮後半	すべて
5	2015.8.17	富士宮	カテゴリ分類
6	2015.8.22	富士宮	カテゴリ分類
7	2015.8.22	富士宮	カテゴリ分類、指標マトリックス作成 <WG開催>
8	2015.9.1	富士宮	指標マトリックス作成
9	2015.9.2	富士宮	指標マトリックス作成
10	2015.9.7	富士宮	指標マトリックス作成
11	2015.9.9	富士宮	指標マトリックス作成
12	2015.9.12	富士宮	指標マトリックス作成
13	2015.9.12	富士宮	指標マトリックス作成
14	2015.9.14	富士宮	指標マトリックス作成
15	2015.9.16	富士宮	指標マトリックスのレビュー
16	2015.9.19	富士宮	指標マトリックス作成
17	2015.9.22	富士宮	指標マトリックス作成
18	2015.10.7	大牟田	重要度分類 <WG開催>
19	2015.10.17	大牟田	カテゴリ検討、優先順位設定

富士宮市インタビュー調査結果を 踏まえた評価指標案（大分類）

- 大分類（富士宮の特徴といえる領域）

1. キーパーソンの広がり
2. 本人の声と行動
3. 商店街の参加

- その他の大分類

地域ベースで認知症を考える、トップダウンの活動の広がり、ボトムアップの活動の広がり
認知症にやさしいまちのゴール、サポーター講座、フォーマルな場の広がり
コミュニティ・ソーシャルワーク、キーパーソンを支える仲間、行政
本人に寄り添う人の広がり、インフォーマルな場の広がり、イベントの広がり
地域ケア会議、社協、行政－社協のつながり、メディアの参加
無関心層へのアプローチと変化、企業の参加、認知症への意識の変化
移動のサポートと取り組みの広がり、買い物サポートと取り組みの広がり
認知症の理解の広がりとメリット、介護事業者、商店街の参加、子どもとの活動

富士宮市インタビュー調査結果を 踏まえた評価指標案

- 別紙を参照

大牟田カードの カテゴリ化・重要度投票

(作業用) Fidelity_alpha_1018 - Excel



ファイル ホーム 挿入 ページレイアウト 数式 データ 校閲 表示

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	ID	区分	問No	問内容	重要度	カテゴリ	サブカテゴリ	キーセンテンス
2	1 01	1-(16)	Y氏の思い		11			相談があるのはそこに「困り」があるから現場にいか なければ分からない
3	2 01	1-(16)	Y氏の思い		11			全ては「人」が中心になっている
4	3 01	1-(16)	Y氏の思い		11			(認知症や要支援や高齢者の)地域の声を聞く場が かなり縮小されている聞く場をつなげてほしい
5	4 01	1-(16)	Y氏の思い		11			後に続く職員に「思い」や、どのように動かしを見せな ければいけない
6	5 01	1-(16)	Y氏の思い		2			行政の担当職員が入れ替わると、当初の意識が薄 れてくる
7	6 01	1-(16)	Y氏の思い		11			(行政は)介護サービスの事業者協議会やケアマネ 連絡協議会があるからこそ現場と親しい距離にいら れる
8	7 01	1-(16)	Y氏の思い		2			地域には11年間の積み上げがあり、うまく対応してい る
9	8 01	1-(16)	Y氏の思い		111	SOS模擬訓練	模擬訓練	徘徊模擬訓練には市の職員が同席する
10	9 01	1-(16)	Y氏の思い		11			(徘徊模擬訓練では)新しい職員は現場の声を受ける ことで学べるようにしている
11	10 01	1-(16)	Y氏の思い		111	地域に対する行政の姿勢		地域密着型の運営推進会議へも行政職員の参加を 必須としている
12	11 01	1-(16)	Y氏の思い		2			介護サービス事業者協議会の事務局を市役所が 持っている
13	12 01	1-(16)	Y氏の思い		0			当時の経験を知る市職員(一部のみ(3人/20人中) だが、その中では当時の意識は共有できている
14	13 01	1-(16)	Y氏の思い		111	ケアタウン		市職員が異動になっても、異動先と連携し、相談協 議を行えるようにしている
15	14 01	1-(17)	「思い」を持った人が少 なくなったということ		0			別の部署に行っても他とつながることの重要性が生 かされている
16	15 01	1-(17)	「思い」を持った人が少 なくなったということ		111	キーパーソン		(思いをもった人は)商業関係の開発関係に異動して も福祉とのつながりが必要だと(見出している)
17	16 01	1-(17)	「思い」を持った人が少 なくなったということ		111	キーパーソン		(思いをもった人は)市営住宅の運営でも高齢者が 「はたらける人でもある」ということを見出している
18	17 01	1-(17)	「思い」を持った人が少 なくなったということ		2			認知症の取り組みもプロジェクトチームに一人一人 が加わることによって課全体の取り組みとなった

大牟田市インタビュー調査結果を 踏まえた評価指標案（大分類）

- 大分類（大牟田の特徴といえる領域）
 1. ケアタウン
 2. SOS模擬訓練
 3. 子どもと高齢者
- その他の大分類

まちづくりのためのしかけ、地域ネットワーク、専門職と行政職のペアワーク
地域に対する行政の姿勢、行政のお墨付き、行政は黒子、まちづくりの哲学
社協、病院、包括、コミュニティ・ソーシャルワーク、伝え方（横と縦）
本人の声、ダイバーシティ、商店街

認知症フレンドリージャパンサミット2015

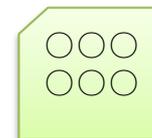
- 日時：2015年9月5日（土）6日（日）
- 会場：明治大学中野キャンパス
- 参加者：認知症の当事者・家族・自治体関係者・医療介護関係者・企業関係者
- 評価指標セッションに約40名が参加



作業シート（各自1枚）

評価指標のタネ

ビジョン・目標
大カテゴリー



指標

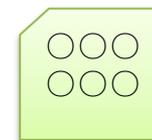
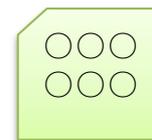
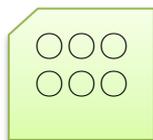
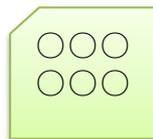
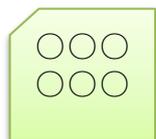
1

2

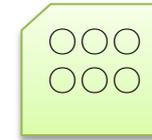
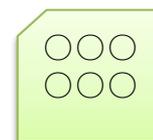
3

4

5



感想



ワーク1

大切にしたいこと（ビジョン）を考える

- 個人として1～3個考える（ポストイット）
- チームで「なぜ大切にしたいか」を話す
- 個人として1個選ぶ

ワーク2

カテゴリー×レベルを考える

- 各自：カテゴリー（1）、レベル（5段階）
- チームでお互いに感想を述べる
 - レベル感は納得しやすいか？
- 感想を受け、各自修正する

ワーク3

席をかえて、同じことを繰り返す

- チームでお互いに感想を述べる
 - レベル感は納得しやすいか？
- 感想を受け、各自修正する



集まった
40指標案

参加者による記入例

評価指標のタネのシート

ビジョン・目標：大カテゴリー

本人が
生きがいを
感じる

指標	レベル1~5				
	1	2	3	4	5
本人が 役割を 持っている	本人の 役割が ない	家庭内で 役割を 持っている	認知症が公開 せず、社会的 役割を持っている	認知症が公開し、 社会的役割 を持っている	認知症が公開し、おまの 当事者としての 新たな役割を 持っている

もやもや・感想

グループで共有するこじ、より多くの
発想が生まれました。

	ビジョン	指標	レベル	感想
1	認知症の人の生活の満足を知る	認知症の方が日常の居場所に満足している数値	<ul style="list-style-type: none"> ①全くききとれない（5人以上）、家族が答えた ②5人以上の人から聞き取れた ③認知症の1割の人から聞き取れた ④認知症の5%がまあまあ満足している ⑤認知症の1割の人がまあまあ満足している 	<p>やはり主語を明確にすることが大事。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①認知症の人が…（原点） ②家族が… ③行政が… ④会社が…
2	関心を持つ人を増やす	フレンドリーCVSを母体とする1200人／日・客数	<ul style="list-style-type: none"> ①認知症のお客さんに関心がない ②販売スタッフがあいさつするとする ③他のお客さんに話をする ④お客さんコミュニティができる。助け合い。知る ⑤ほかの店にも拡げる 	
3	社会参加	賃金労働	<ul style="list-style-type: none"> ①労働する場がない ②労働することについて皆で考える ③ボランティアに近いが働き先がある ④一部の理解ある企業等で受入れがある ⑤社福法人や官公庁で働き先がある ⑥労働する場を選択できる 	
4	食べることを通し子供と高齢者が集える治療継続ができる 歯科で食べることを通じて感心 地域のみんなが共有できる？	歯科が認知症に取り組む	<ul style="list-style-type: none"> ①予約に来なくても放置 ②流れをつくる 行政に連絡する ③治療ができる環境をつくる 場所と知識 ④必要な治療継続して置けられる 	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>集まった 40指標案より</p> </div>

集まった
40指標案より

5	好きなところへ移動できる	(免許がなくても)車で移動できる	<ul style="list-style-type: none"> ①誰も乗せてくれない ②家族が乗せてくれる ③知ってる人が乗せてくれる ④近所の人に乗せてくれる ⑤誰でも車に乗せてくれる 	
6	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の住民のネットワーク ・地域との関係性 情報の収集、共有、提供	(情報共有)	<ul style="list-style-type: none"> ①情報共有を行わない ②医療・介護関係者との情報共有ができる ③収集した情報を医療・介護・家族・地域へと提供し、共有することで理解を得ることができる 	
7	認知症でも一人暮らしが継続できる 認知症の人を見守るネットワーク 社会参加	地域のサロンへ行く	<ul style="list-style-type: none"> ①サロンを知らない ②民生委員に誘われてサロンに参加する ③月毎にサロンへ行く ④毎月一人でサロンへ行く ⑤毎月友人を誘ってサロンへ行く 	サロンでできること、それぞれ違うので選択肢がたくさんあるといい カラオケ、農業、囲碁など
8	同エリア内の企業で集まり、そのエリアの課題を定期的に話し合う	企業が所在地のひとの課題に一つ以上取り組む 認知症という言葉がなくす	<ul style="list-style-type: none"> ①所在地の人の課題に気づいていない ②何とかしたいしなきゃと思う社員がいる ③何とかしたいしなきゃと思う役員がいる ④すでに企業として人の課題に自主的に取り組んでいる 	自分が始められそうなこと。サミットの様に中央区でも様々な企業が集まって話合えば企業が「ジブンゴト」として考える契機になる その中で「認知症」に触れていければ。

参加者の感想

- 様々な職域の方々から意見をいただき、視野が広がった。サービスを提供するうえで情報収集はたいせつだと感じた
- 指標を検討することは必要であり難しい
- 指標をつくる、話すことで見えてきた感じがした
- 認知症特有の話ではなくなる
- 継続性の担保、後継者の育成、首長交代でも続けられるか？
- 順位づけ難しい
- どこをゴールにするか、指標をどう細分化するかモヤモヤしましたが、大変勉強になりました
- 役立つ仕組みを作るには、家族や町の意見が重要なんですね
- ゴールとスタートだけでは大きすぎて何をすればよいか見えづらい
- 段階的に考えることが大切だと改めて認識した
- グループで共有することで、より多くの発想が生まれました

ウェブサイトでの情報発信

認知症の人にやさしいまちづくりに関する研究



Photo: Morning in Amsterdam / by Masahiko Shoji / CC-BY 4.0 International

国際大学GLOCOMでは、「認知症の人にやさしいまちづくりに関する研究」を進めています。高齢人口が急増する中、医療・介護・福祉等の専門領域だけでなく、認知症の人が生活をする地域社会の都市計画・交通・金融・流通・ICTなど様々な分野で取り組みの必要が生まれてきています。国際大学GLOCOMでは、社会イノベーションにかかわる実践活動の場となりながらそのプロセスを研究する「社会イノベーションラボ（旧イノベーション行動科学プロジェクト）」の活動の一環として、「マルチステークホルダー×社会課題中心アプローチ」をこのテーマで実践しています。

<お問合せ>

庄司昌彦（准教授・主任研究員） shoji[at]glocom.ac.jp

- 「第2回WHOグローバルフォーラム：高齢者のためのイノベーション」が開催されました（2015/10/7-10/9）
- パターンランゲージ「旅のことば」が2015年度グッドデザイン賞を受賞（2015/9/29）
- 認知症フレンドリージャパン・サミット2015を開催しました（2015/9/05-06）

認知症の人にやさしいまちづくりに関する研究

認知症フレンドリージャパン・サミット2015を開催しました（2015/9/05-06）



認知症の人にやさしいまちづくりに関する研究
<http://www.glocom.ac.jp/project/dementia/>

インタビュー結果からだけでは 抜け落ちる可能性のある評価項目の検討

- 第1回会議での指摘を受け先行研究や他分野の評価項目に関する文献調査を実施中
- 粟田主一2013「認知症の地域連携——認知症に対応できる地域包括ケアシステムの確立に向けて」『日本老年医学会雑誌』50(2)、p. 200-204
 - 「地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメントシート」(Dementia Assessment Sheet in Communitybased Integrated Care System、DASC)の紹介
- 武田章敬2013「認知症の地域連携——地域支援体制作りの有用性の評価」『日本老年医学会雑誌』50(2)p.197-199
 - 「認知症の方の地域での生活のしやすさや便利さに関する実態調査」の概要を紹介
- 辻村弘美・小泉 美佐子2010「認知症高齢者のおだやかスケールの開発」『北関東医学』60(2) pp119-134
 - 認知症の人が、他者から見て、自分らしさを保ちつつ、周囲との生き生きした交流を持つような「よい状態 (well-being) 」にあることを評価する「おだやかスケール (OS) 」の紹介。質問項目は、Kitwood「Dementia Care MappingのWell-Being」指標と類似
- Jマトリックス (日本版)
 - 米国のReadiness Guidelinをもとに作成。情報化進展度をa)企業、b)行政、c)小中高校 d) 大学、e)医療、f) 家庭、等の動向も含む23項目の観点から1~4の4段階評価

分かってきたこと

- 指標化には①モデル地域をもとにした開発・検証的プロセスと、②ワークショップをもとにした普及・啓発的プロセスの方向性がある
- ①はWG作業の延長線上にあり、②はサミットの延長線上にある
- サミットでは、自分たちの取り組みを指標化することで何を目指しているのか、何を行えばいいのかが明確になった人もいた
- 指標化作業に多くの人を巻き込んでいくことで、ネットワークの拡大を促進する意味もある
- 普及啓発には②の展開が重要。ワークショップ等を通じた各地域の個人や団体・事業者の取り組みや目標の可視化、共有化は、地域の個人や団体・事業者の意識の深化や相互理解を進め、アクションへの手ごかりを与えていくことができるのではないかと

分かってきたこと

- 指標化した取組みの要素には、2つの側面がある
 - ①各地（富士宮・大牟田）で特徴的な要素
 - ②（他地域でも）共通して取り組まれている要素
- すべての要素を一度に指標化することは困難。
今回はインタビュー素材から①を抽出し指標化することから進めている
- ①の指標には、先進地域の取組みの特徴への理解を進める啓発的效果がある

今後の作業予定

1. 大牟田の3つの大分類の下にサブカテゴリ（中分類 = 指標項目）を作成し、5段階のレベルを検討して指標化していく
（11月初旬完了予定）
2. 富士宮と重複・類似の指標をみつけ修正・調整
（11月中旬完了予定）
3. とともに指標化されていないカテゴリをまとめ、指標化すべきものを優先順位をつけて作業する
（カテゴリ整理は11月中に完了予定）